

急性中耳炎における鼓膜切開および レーザー鼓膜開窓の検討

山内 一真 保富 宗城 鈴木 正樹 森山 智美
田村 真司 藤原 啓次 山中 昇

和歌山県立医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科

【目的】乳幼児急性中耳炎は、近年起炎菌の薬剤耐性化と患児の低年齢化に伴い、抗菌薬治療にて改善しない遷延例や反復例などの難治例が増加し問題となっている。当科では個々の症例で重症度を考慮し、従来の鼓膜切開やレーザー鼓膜開窓といった外科的治療を含めた治療選択を行ってきた。今回我々は抗菌薬のみの保存治療群、従来の鼓膜切開症例群およびレーザー鼓膜開窓症例群とで、その治療率を鼓膜スコアにて比較検討した。

【症例】保存治療群は16名23耳、鼓膜切開群は21名33耳、レーザー鼓膜開窓群は25名41耳であった（年齢は各群ともに5歳未満の症例を選択した）。初診時診断では反復性中耳炎が保存的治療群で44%、鼓膜切開群で52%、レーザー鼓膜開窓群で64%であった。これらの鼓膜スコアを初診時、2週後、4週後、12週後それぞれについて比較した。

【成績と考察】鼓膜切開群、レーザー開窓群では治療後のスコアが全て初診時のスコアと比較して有意に低下したが、保存治療群は2週後で初診時と有意差を認めなかった。また各治療群における鼓膜スコアの改善度を3群間で検定すると、2週後の改善スコアのみが3群間で有意差を認め、4週後、12週後では3群間で有意差を認めなかった。また鼓膜切開群とレーザー開窓群とは共に保存治療群に比べて改善傾向を認めたが、レーザー開窓群と鼓膜切開群の間には有意差を認めなかった。以上より鼓膜切開もしくはレーザー鼓膜開窓により外科的に排膿ドレナージを行うことで術後早期に治療効果を示し、鼓膜所見のすみやかな改善に働くものと考えられた。